

不思議の国・ブルネイ

市川 聡

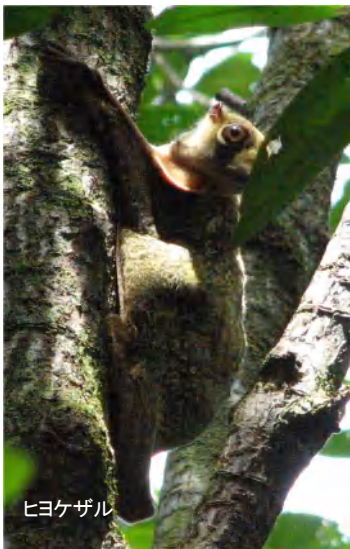


ウル・テンブロン国立公園／キャンピータワー

1. あこがれの国へ

1997年ボルネオ島マレーシア領ミリからムルムルへ飛ぶ小型プロペラ機は、国境を越えブルネイ王国の上空を低く飛行した。そこには飛行機から見渡す限りの広大な熱帯雨林が広がっていた。マレーシア側が伐採跡地やプランテーションばかりで、川は茶色く濁っているのに、ブルネイは熱帯雨林がまさに覆い尽くすという感じで広がっており、川は黒々として澄んでいる。熱帯の川という茶色く濁っているものかと思っていたが、なんのことはない熱帯雨林が伐採されたために赤土が流れ込んでいるのであって、原生林の中を流れる川はあくまで澄んでいるのである。伐採された木材が日本に運ばれていると思うと、なんともやりきれない気分がしたものだ。

ブルネイは石油に浮かぶ国と言われ、世界で最も裕福な国の一つである。おそらく自分の国の森を切るよりも、お隣から買った方が安上がりなのであろう。おかげで広大な熱帯雨林が残された。自然保護とはつまるところ経済問題なのだ。当時いつかはこの広大な熱帯雨林を訪れたいと強く思ったのであるが、当のブルネイは、観光で外貨を稼ぐ必要もなく、アプローチが全くないというというのが現実であった。



ヒョケザル

しかしブルネイの王様も石油がいつまでもあるわけではないという現実をようやく少し認識し始めたようで、にわかに状況が変わってきたようだ。国際機関・日本アセアンセンターが、ブルネイ・フィリピンへの旅行商品を作るために日本の旅行者を集めてサーベイツアーを実施するという情報を、風の旅行社・原さんから教えて頂き、勇んで申し込んだ次第である。今回は風カルチャークラブのブルネイ熱帯雨林ツアーを企画するため同社の嶋田京一君と2人であこがれの地ブルネイへと旅だったのである。

2. バンダール・セリ・ベガワン (BSB)

フィリピン経由で降り立った首都BSBの空港は、閑散としていて静かであった。フィリピンが人で溢れかえっていたので、幾分ホッとしたものだ。

金びかのモスクがいかにもといった感じの町へ移動し、今回案内してくれるプレーミートラベルの事務所で行程の打ち合わせを行った。ここには日本からの旅行者を受け入れるために日本人スタッフが数名いた。

この国は税金、教育費、医療費は無料というパラダイスのようなところで、ここに住むスタッフをうらやましく思うのだが、残念ながらイスラムの国であり酒が飲めない。マレーシアもイスラムの国であるが、こちらはマレー人以外にはうるさくなく、中国人の店などで酒が手に入ったものだが、この国では酒類を販売していないので、ツアー中飲めるのは持ち込みが許されている酒類2本またはビール12缶までだ。嶋田君と2人で缶ビールを1日2本といいながらちびりちびり飲むのは、なかなか辛いものがあった。いざとなれば車で30分も走れば隣のマレーシアへ行けるので、また買ってくればよいのだが・・・

ところで今回ブルネイへ行くに当たって参考にしたのが、安間繁樹著のボルネオ島アニマルウォッチングガイド(2002)で、いくつか是非行ってみたいところを、事前にチェックしていた。

しかしどうも様子がおかしい。楽しみにしていた国立公園内のトレイルが、既に壊れていて回れないと言うのである。

出発直前に小林天心さん(観光進化研究所)からTRAVEL JOURNALに連載されていたブルネイのレポートをお送り頂き、飛行機の中で読ませていただいた。この中に、「10年ほど前に観光に関心のある大臣がいろいろと観光開発を行ったが、その後放棄されてしまい機能していない施設が多い。」と書かれていた。それである程度覚悟はしていたのだが、実際に現地ですその話に直面すると愕然としてしまう。

いろいろと聞いていると、「通れないので閉鎖している」だけで「通ってはいけない」とは言っていないようなので、なんとかこねて、そのトレイルをまわるよう頼み込んで、スケジュールを作った。この時点で当初ガイドしてくれる予定だったエコツアー責任者のジョナサンは、急に予定ができたといって、ガイドは現地の若者ランギ君へと振り替えられた。エコツアーの看板を掲げながらも、どうも自然を売り物にしている様子は感じられず、我々のようなややこしい客の相手をしたことがないので、とっとと逃げられてしまったようである。

ここから国立公園のある東ブルネイへの水上バスがでるまで少し時間があつたので、町の散策をかねて買い物に出かけた。ここにはヤヤサン・ショッピングセンターという王様の財団が作った巨大なショッピングセンターがある。そもそもブルネイは、三重県ほどの国土に30万人程度の人が住む小国で、どこへ行っても妙に閑散としてしまいち活気がない。そんなところに巨大なショッピングセンターを建てたわけだから、儲けははなから度外視しているのだろう。人影もまばらで、なんとなく店も充実していない。特に情報収集によった本屋には、図鑑類など一切なく、ブルネイの自然に関する本は全く手に入らなかった。

一方治安はすこぶる良いようで、昼食によつたレストランでも、車のドアや窓は開放した

ままであった。

3. ナイト・カエル？ ウォッチ

東ブルネイは飛び地となっていて、陸路を移動するとマレーシアを横切らなければならないので出入国管理の手続きが必要となるが、船で行くとその手間が省けて便利である。

BSB の船着き場をでた水上バスは、水上集落の脇を抜け、マングローブで覆われた林の中の水路を、右へ左へと船を傾け、猛スピードで疾走する。なかなか爽快な船旅である。迷路のような水路はどこをどう走ったのか、さっぱりわからないが、40～50分ほどで東ブルネイの中心地バンガルの町に着いた。

ここでガイドのランギ君が出迎えてくれる。イバン族の彼はロッジ近くのロングハウスで生まれ育ったそうで、ぼっちゃんりした感じはムルのウイリーさんを若くしたような感じ。笑顔のいい好青年だ。ここからは車で30分ほどでパタンドリにあるフレームトラベルの出先宿泊施設、レインフォレスト・ロッジに到着した。

ロッジは、ムルのエンダヤン・インのように川沿いに建てられており、ここから先は道がないので、ロッジの前からロングボートに乗って上流の国立公園へ向かうことになる。

川向こうには、熱帯らしい高木が聳えなかなか風情のあるところである。ロッジのデッキからは様々な野鳥やリスを見ることができる。ただ目の前の船着き場が、若者達のたまり場になっており、酒もないはずなのに遅くまでなにやらに騒々しかった。

ついた日の夜、早速ナイトアニマルウォッチにでかけた。車からサーチライトで動物を探すのかと思いきや船に乗って川を渡ると、ロッジの向こう岸の真暗闇の泥沢をザブザブぬかりながら、歩き始めた。わたしは地下足袋で良かったが、嶋田君は登山靴で、初日からグチョグチョ。沢での移動が多いボルネオでは、登山靴は通用しない。結局嶋田君は、ランギ君のはいている、長靴をスニーカーに短く切ったような水陸両用ブルネイ靴を購入し、愛用することになった。プラスチック製なのでドロドロになっても洗えばすぐ乾く、なかなかのすぐれものであった。

しばらくするとカエルが1匹。またしばらくいくと別の種類のカエルが1匹。結局4、5種類のカエルを見ただろうか。カワウソやイノシシの足跡はあったもの、いまいちカエル以外には出会えそうもない雰囲気であった。帰り道、倒木渡りで失敗した嶋田君は、川の深みに落ちてしまい、いきなりデジカメ、パスポート、財布が水没。彼は気丈にしていたが、初日から何とも情けないことになってしまった。

4. ブキット・パトリ レクリエーション林

翌日からいよいよ本格的にブルネイの旅がはじまった。まずブラダヤン森林保護区に設けられたブキット・パトリ レクリエーション林へ

訪れた。ここは国立公園のようにロングボートで行かなければいけない奥地ではなく、車で行ける手軽さがある。安間さんの本によると「フタバガキ林が美しい。訪ねて悔いのない自然観察の穴場。」と書かれており、手始めにブルネイの熱帯雨林をながめるのには、絶好の場所である。

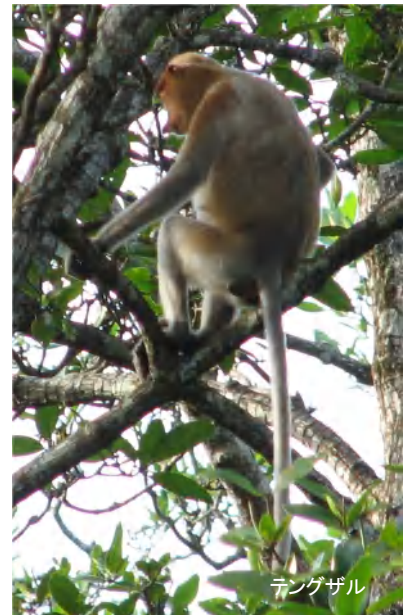
ロッジから車で一度バンガルの町にもどり、そこから東へ15分ほどでブキット・パトリに到着する。驚いたのは途中、電線にホーンビル(サイチョウ)がとまっているのではない！ホーンビルは熱帯雨林の原生林を代表する大型の鳥で、サイの角のような突起を嘴の上に持つのが特徴である。それが町中の電線にとまっているのであるから驚きである。お隣マレーシアの世界遺産にもなっているグヌン・ムル国立公園ですら、もうホーンビルは捕りつくしてしまったようで、見る事ができなかった。ムルでは民俗舞踊のホーンビル・ダンスにその面影をとどめるだけである。ここにブルネイの森の豊かさが象徴されているような気がした。

ブキット・パトリには全長5kmの1周トレイルが設けられている。急なところは木階段が整備されており、歩きやすい快適なルートである。今回歩いたのはこのうち約1600m。標高約300mのところには展望台があり、そこまで往復した。

入口には簡単なインフォメーション施設やトイレがあり、ここでコースマップが手に入る。

この森は大きく「山裾部分」と壁の岩といわれる「崖部分」、崖の上の「台地部分」に分けられる。今回のルートでは、入口から1150mまでが「山裾部分」で、まさに美しいフタバガキの森が広がっていた。遠くテナガザルの声が森にこだまし、フタバガキ類やメンガリスなどの高木が巨大板根に支えられ樹高50mくらいの高さで樹冠を作っている。圧巻は60m近い高さの巨大ドリアン。この高さからドリアンの実が落ちてきたら、間違いなくひとたまりもないであろう。

壁の岩は堆積岩でできた垂直の岩壁で我々



テングザル



スローロリス

が登ったところでは高さ8m程度、森の中とは異なる草本が着生していた。林床では花らしい花は見なかったがこの崖にはかわいい花が咲いていた。

この壁の上にとると岩がごろごろしてくる。岩を抱いた木は、まるで屋久島の森のよう。さすがに巨木は少なくなる。転石の岩場を抜けると、突然視界が開けて展望台にでる。さわやかな風が吹き素晴らしい眺望。ここで休憩していると突然けたたましい鳴き声が響き、眼下にホーンビルが飛んだ。樹冠をゆるやかに滑空する大型の鳥の姿は、熱帯そのもので感動的であった。



ブキット・パトリの森

ここから奥へ行くとケランガスというタイプの森になるとマップには書かれている。ケランガスはイバン族の言葉で稲の育たない土地という意味。水はけの良い砂岩質で溶脱が激しく、極めて栄養に乏しいため、限られた植物しか生きられないような土地である。以前マレーシアのパコで訪れたことがあるが、蟻植物(アリノスダマ)やウツボカズラなど昆虫を利用して栄養をとる珍しい植物が分布していた。ポルネオの森林タイプとして重要な要素であり、興味深かったのであるが、ランギ君はここから先は行ったことがなく大変だの一点張りで、いまいち様子が分からなかった。

往復2時間ほどで入口に戻ってきた。熱帯雨林を演出する巨大ヤスデ、シロアリの巣、ミツバチの巣等々ポルネオへ来たことが実感できるものが揃っており、半日でも十分満足のいくコースだったが、1周5kmといえばヤクスギランドの1周コースくらいの長さであり、1日ゆっくり歩いて楽しむのも、良いツアーができそうである。

この日はそのあとイバン族のライスフィールドやランギ君の住むロングハウス訪問、ミニ動物園などを回った。ポルネオには豊かな野生動物がいるが、ジャングルに棲む夜行性のものが多く、実際に目撃することは難しいものが多い。このミニ動物園は、ベアーキャット、シベット、マメジカ、サンバー等々ポルネオのネイティブの動物が飼われており、なかなかおもしろかった。

5. ウル・テンブロン国立公園

翌日はよいよ今回の目玉であるウル・テンブロン国立公園を訪れた。ロングポートでテンブロン川を遡ること約30分、ベラロング川の合流する2股が国立公園の入口である。ここには川に沿って宿泊施設や管理施設が並んでおり、そのスケールにまず驚かされる。それぞれの施設が長い廊下と階段で結ばれており、まるで万里の長城ようである。その後この施設に1泊したが、一見立派に見えるものの、着いてみると電気はこない、水はでない、レストランは閉鎖状態、それに長い階段はスツケースを引きずることもできないという、全く使えない施設であった。金をかけて施設を作ることにはするが、そのあとの管理には全く関心がないようであきれてしまう。

この施設からテンブロン川を渡った対岸からトレイルがはじまる。ここに完成したばかりの吊り橋がかかっているのであるが、まだ検査が済んでいないとかなんとか言って、なぜか渡りたがらない。よくよく聞いてみると、以前の橋がフレミーのツアー中に落下したため慎重になっているとのこと。高さ40mほどもある吊り橋で、人が渡っているときに落ちたなどとても信じられないが、たまたま客がUSアーミーで受け身がうまかったから死ななかつたとか？いやはやこの国の施設は全く信じられない。

い。

川を渡ると急斜面が待っているとよく言うのであるが、ここも全くその通りで、とてつもなく急な階段が待ち受けている。安間さんの本によると、国立公園部分はかつて一度も焼き畑が行われたことがない原生林だが、それというのも地形が急峻すぎて村ができるようなスペースがなかったためだと書かれていた。まさにそのとおりで、モツチョム岳への最初の登りのような急斜面が600mほど続くのである。但しこの部分は良く整備されていて、歩きやすいことは歩きやすい。道沿いには多数の解説板が置かれ、休憩用の東屋も多い。但し斜面が急すぎるためか、巨木は多くない。森としてはブキット・パトリのフタバガキ林の方が豊かな気がした。

30分ほどで尾根にあがる。そこから少し行ったところにこの目玉であるキャノピーウォークウェイが姿を現した。マレーシアのものが巨木と巨木を結び樹冠下の吊り橋だったのに対して、このものは完全に自立した5本の鉄製のタワーを橋で結んだもので、自立している分、完全に樹冠を突き抜け、樹冠の上から熱帯雨林を見下ろすことができる。高さ50m長さは80mほどある。特に宿泊した日の早朝、タワーで夜明けを迎えたのであるが、しらじらと明ける森に、テナガザルのモーニングコールが響き、谷間を流れる朝霧がなんとも素晴らしい景色で、しばし時がたつのを忘れて、熱帯の朝を満喫することができた。早朝にはコビトリスやムササビも見ることができ、満足度の高いものであった。ただこの施設もどこまで信用できるか、一抹の不安を感じる。

さてここから先が、例の通行止め部分である。ここまでもそうだったが、このトレイルはコンクリートで基礎を打った上に高床の階段や木道が引かれており、とても立派なものである。しかしこの造りは老朽化するとかえってやっかいで、いつ踏み抜くか分からない高床木道はスリル満点。ところどころが倒木で完全に破壊されており、そのたびに木道から下りるのもやっかいで、通行止めになっているのもうなずける。

尾根筋の平坦部にでると巨木は少ないが風が通って心地よい森歩きとなる。背中に角のある奇妙なアリやカラフルな昆虫、樹幹から垂れ下がるジャックフルーツや獣の痕跡などをみながら2時間ほどのんびりと歩く。整備されたばかりの頃は、さぞ快適であったであろうと思われる。ここから再びテンブロン川へ向かって下りその支流アバン川の滝へと向かう。テンブロン川にかかっていたはずの吊り橋はもはや跡形もなくなっていた。腿あたりまで水に浸かりながら渡渉する。少し増水したらとても渡れないであろう。

ここから支流のアバン川に入り、滝を見に行く。アバン川は、小さな小砂利の川で、快適な沢歩きを楽しむことができる。途中シルバリー

ーフモンキーにも遭遇。およそ30分で、滝に到着する。しばし滝に打たれて、熱帯の暑さを忘れる。かつてはこの滝の上にツリーハウスがあったようで、ビジターセンターにはその模型が置かれていたが、今はこれも跡形もないようだ。いやはやもったいない話である。ここから公園入口まで川沿いにトレイルが続いていたそうだが、もはや道ではないということで、ロングポートで公園入口まで戻った。

我々風カルチャークラブチームは、ブルネイの自然をじっくり観察するため、本体とは別に先乗りして国立公園の調査を行ってきた。本隊と合流した後、国立公園に宿泊する夜に、再びナイト・アニマルウォッチに挑戦した。レインフォレストロッジでのナイト・カエルウォッチの際に、国立公園に行けばもつといういろいろな動物が見られると聞いていたので、国立公園でのナイト・アニマルウォッチを楽しみにしていた。しかしこの公園のルートは限られているようで、再びキャノピーウォークウェイまで登るとい。これは夕食後ちょっと動物を見に行くといったアトラクションではなく、本格的な登山である。そのうえ登りは整備された木道ではなく、裏にあるジャングルトレイルという山道を利用した。明かりを照らしながら、まさにモツチョムへの登りのような急な山道を登っていく。間の悪いことに何もでてこない。他のメンバーの顔に明らかに疲労と不満が現れてくる。

何もでてこないまどうどうキャノピーウォークウェイに着いてしまった。この日のガイドは、本隊ともにやってきたフレミー・トラベルのエコツアー責任者のジョナサン。彼によると今日は暑くて動物がいないのだという。いやはやご苦労様である。ベンチで涼んだり、またタワーに登ったりしてしばし気分を変えて、木道を下山。ここでジョナサンがヒットを飛ばす。木の上にスローロリスを見つけたのである。原猿の仲間で大きな丸い目が、木の上で光っている。その名の通りゆっくりと動くのでじっくりと観察できた。なんとか一矢報いて盛り上がったのだが、なんとジョナサンはこれをムササビと言いつけるのだ。こちらは図鑑を出して、見せているのに意見を変えようしない。これにはせっかく初めてスローロリスを見て盛り上がった気分がしぼんでしまう。そもそも本屋に図鑑がなかったように、彼らはガイドであるにもかかわらず図鑑を持っていない。こちらがマレーシアで仕入れたポルネオの図鑑を見せたら、こんな本があるのかと驚いて、一生懸命見ている。そんなことから種名に対する認識は甘く、ロジックにでてくるリスの名前をランギ君に聞いたときにも、リスの仲間には、リスとムササビがいて、あれはリスだと言われて、あきれてしまった。

今回はテンブロン川でのカヤックも楽しんだ。ロッジから国立公園入口までの半分ぐらいの距離を2時間半ぐらいかけて下った。今回の水量であれば、難しい事はなく、適度に楽しめる瀬を乗り越えながらの、楽しい船旅であった。途中少し上陸して歩いた小沢ではオオトカゲの足跡を見たり、淵にたまった落ち葉を両手でがぼとすくい上げて、小魚を捕ったり楽しく過ごした。また途中の川岸には蝶が集まって吸水しているところがあり、美しい熱帯の蝶の群舞を見ることができた。ついでに泳いで渡るキングコブラも目撃した。ちょっとびっくり。

6. セリロン島マングローブ林

熱帯雨林を満喫したあとは、マングローブを訪れた。再びバンガルから水上バスに乗ること約40分、セリロン島レクリエーション林に到着した。東ブルネイの東端の海岸を川で陸から切り取ったような形でほぼ全島マングローブで覆われており、島を横断する形で約 2.5km ほどの木道が引かれている。

圧倒的に多いのはフタバナヒルギで、多くのアーチ状の支柱根で幹を支えている。そこにホウガンヒルギとニッパヤシが混ざり、コースの最後の方に膝根が立ち上がるオヒルギがでてきた。種類のには単調で分かりやすい。樹高 30m を越える高木が聳えるマングローブは圧巻である。

マングローブの根本にはエビやアナジャコ、カニ、小魚がいてにぎやかだ。また今回はヒヨケザルを見ることができた。ヒヨケザルは顔がキツネザルに似ていることからサルといわれているが、サルとは関係のない生き物である。ムササビのように空を滑空するが、ムササビとも違う、珍しい動物だ。尾の先まで皮膜に覆われているので、飛ぶとホームベースのような形になる。木道のすぐそばの木にいたので、間近でじっくりと見ることができた。そんなことをしながら1時間ほどのんびりと歩いてマングローブの自然を堪能することができた。夜にはワニが泳いでいるというから、夜に訪れるのも面白いかもしれない。

一度 BSB に戻ってから、小型の水上タクシーに乗り換えて今度は川を上流に遡り、テングザルを見に行く。テングザルはマングローブの葉を主食とする大型の猿で、ボルネオ固有である。なんといっても天狗のように突き出た



鼻が特徴。だいたい群がいるマングローブの位置が分かっているようで、90%の確率で見ることができそう。

マングローブといっても、川沿いに残された帯状の林で、裏には住宅や道路が透けてみたりする。そんな林にテングザルが姿を見せる。こんなところもブルネイの自然の豊かさを印象づける。3つほどグループをみただろうか。雄の大きな鼻や出張ったお腹をしっかりと写真に収めることができた。このアニマルウォッチングクルーズではカニクイザル、マングローブヘビ、オオトカゲ、シロガシラトビなど多くの動物を見ることができ、おもしろかった。

7. ジャングル・デーブ

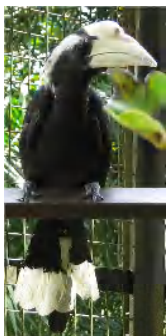
今回のガイドのランギ君は良い目を持ったなかなかの好青年なのだが、いかんせん図鑑もなく、基礎的な自然科学の素養で物足りないものがあつた。上司のジョナサンにおいては、いまいちやる気すら感じられなかった。これでブルネイのガイドはまだまだだなんて帰国するところだった。

最終日、地元観光業者との会食があつた。業者のお偉いさんと会ってもこれといって話もなく、期待していなかったが、いろいろと話をしているうちに、どうも自然に詳しい人物がいることに気がついた。セリロン島でヒヨケザルを見たという話をしたら、それは入口から何m位のところだろうといわれ、まさにその通りだつ

たので驚いたのである。いろいろと話をしていると、オランウータンに出会った話やホタルの木の話、マレーグマの話など、実に興味深い話がポロポロとでてくる。また今回テンブロン川で見かけた、うなぎのような奇妙な生き物についても、ジョナサンはさっぱり要領を得ない説明をしていたが、ブルネイで確か2年前に発見された生き物で、メールで写真を送ってくれば正確な情報を教えてくれると約束してくれた。帰国後メールを送ったところ、すぐに返事をくれ、そのアシナシモリの仲間の学名種名を教えてくれた。

彼の名前は、通称ジャングル・デーブ。MONA FLORA FAUNA TOURS ENTERPRISE の常務取締役でその名刺には Eco-Tourism EXPERT と書かれていた。マングローブのテングザルウォッチングも彼が始めたことらしい。彼の話を聞いていると今回行かなかったところにもおもしろい場所、おもしろい活動がたくさんありそうで、わくわくしてきた。一人や二人のガイドを見て、ブルネイのガイドはまだまだだなどと言って回らなくて良かったと、多いに反省した次第である。

ということで来年の2月にはジャングル・デーブと組んで、ブルネイツアーを実施することになりました。ボルネオの穴場中の穴場といつていいブルネイの自然を満喫できる企画を用意しますのでご期待下さい。



2008 ブルネイツアー 決定！

企画/YNAC、主催/風カルチャークラブ、同行講師/市川聡
2008年 2月7日(木) 成田発 2月12日(火) 成田早朝帰国(5泊6日)

主な行程:

- ・ 夕方のテングザルウォッチング
- ・ ブキットパトリのフタバガキ林、ケランガス林のフォレストウォーク
- ・ ウルテンブロン国立公園での早朝キャノピーウォーク、沢歩き、カヤック
- ・ セリロン島のマングローブ観察
- ・ ブルネイ川ナイトサファリ/ホタルの木、クロコダイルの光る目

詳しくは風カルチャークラブへ
電話 03-3228-1065

